

トータルな計測を目指して

Aiming at Total Measurement

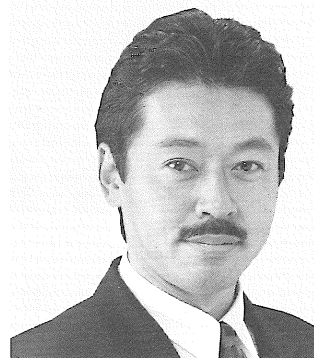
かつて計測機器メーカーは一様にハード開発指向、いわゆる技術オリエンテッドであった。測定方法の開発と追及が主目的で、アプリケーションはある意味でユーザー任せであった。逆説的には、ユーザーの優れた知識と応用技術、あるいは飽くなき探求心に支えられて計測機器業界は進歩し続けてきた。ところが最近、状況は変わりつつある。測定という行為や、その方法に関心をもつユーザーが減り、むしろ計測器を一つのブラック・ボックスと見なす研究者が増えてきた。まず何を測りたいか、更にそれをどのくらいの精度で測りたいかが重要なのであって、どのような原理で測るかはそれほど重要でなくなってきた。メーカーは従来のような、測定原理をベースとする商品展開ではユーザー・ニーズへの対応が十分でなくなり、アプリケーション別のグループ編成の必要に迫られている。

それは同時にメーカーの守備範囲が拡大する事を意味する。つまり、一つのアプリケーションに対して、あらゆる原理の測定器をラインアップしなければならないからである。一方、アプリケーションを限定する事により、簡単な操作で正確な測定データが得られるようになってきた。これに合せてアプリケーション別のコスト・パフォーマンスの良い機器のニーズも増加してきた。測定原理やサンプル条件について広範な知識が必要な汎用製品から、安価で専門化・特定化された小型製品へという傾向は今後も続くであろう。とくに、ここ数年著しい高性能化と低価格化を遂げたパソコンの普及により、小型の分析機器の中には、数年前の何分の一の価格という商品も珍しくない。そして、その操作性やアプリケーション能力は、以前の高級機種よりも数段勝っているのである。

このようなデータ処理も含め、微量で高精度の測定を行うには、測定に関するあらゆる付属機器や設備についても、正しく測定するという立場での展開、あるいは保証のできる体制が、今後一層必要になってくる。分析計だけの精度をいかに向上しても、自ずとその結果には限界があるからである。サンプリングから装置の設置環境に至るまで、測定という流れの源泉から最終データに到達するまで、トータル的にシステムテックに対応していかなければならない。わが社が最近「ACTIVE ZONE 21」という研究開発棟を新設し、シャシ／エンジン・ダイナモメータまで完備した実験室で自動車計測テストを重ねているのは、ユーザー・ニーズにシステムテックに即応するためである。

理化学機器に関しても、ユーザーの生きた声を通じて真のニーズを把握するために、分析センターの強化を推進している。単に製品を提供するだけでなく、その製品を使って何をどのような状態で測ればニーズに対応できるか、という計測技術を高める事も、近年極めて大切である。

ハード、アプリケーション、オペレーション、およびノウハウのそれぞれの技術を、バランス良くコーディネートした商品を開発していく事が、今後最も重要だと考える。



代表取締役社長

堀場 厚

Atsushi Horiba

President